世界の著名な特許にみる ―――――――― 第９回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

エジソン　その８　親日家エジソンと日本人
～発明事業家スピリッツの継承～

「民間外交・近代日本経済の父」渋沢栄一、「日米友好・明治憲法起草者」金子賢太郎、「真珠王」御木本幸吉、「細菌学者」野口英世、「東洋の製薬王・星薬科大創設者」星一、「ＳＦ界巨匠ショートショートの神様」星新一、「モリサワフォント・写植機発明」森澤信夫、「エジソンの社員」岡部芳郎、「日本初外資企業NEC創業者」岩垂邦彦、「東京電機大学と神戸大学工学部とオーム社の創業者」廣田精一

科学＆知財クリエイター・弁理士（雅号）
大樹　七海

１．はじめに

⑴　親日家エジソン

今回は、ある意味で、壮大な回かもしれません。エジソンの発明事業化スピリッツに縁のある、明治から昭和を生きた10人の日本人を取り上げたいと思います。

さて、今まで見てきたエジソンの勤勉さはさることながら、エジソンの方も、出会ってきた日本人の勤勉さと礼儀正しさに、敬意を抱いたようです。

身近では、エジソン社の従業員に日本人青年の岡部芳郎（後述）がおり、その品行を賞賛して、フォード達との自然を楽しむキャンプ旅行にも付き人として同行させています。

また当時欧米では、日清戦争（1894-1895）に勝利した日本に対して関心が高まっていましたが、日本に対しては多くの誤解がありました。

それに対して、妻をアメリカ人とし、キリスト教徒となった新渡戸稲造が、欧米人の法律大家から受けた質問、「日本では宗教がない（宗教がない、となれば野蛮で低俗な国なのではないか、という考えによると思われる）のに、道徳をどう授けているのか」という率直な疑問に、真正面から答えようと、比較文化的見地から、日本人独特の心のありようの説明を目指して執筆されたのが、

『Bushido:The Soul of Japan（武士道）』でした。

同書は、欧米人に対して論理的な説明を試みるために、古今東西の歴史、ギリシャ・ローマ、旧約聖書、孔子・孟子・陽明、欧米の王政、シェイクスピア、マグナ・カルタ（大憲章）、マルクスなど、文学から宗教、法律、政治経済に至るまでの著作と、日本の仏教、禅、神道、茶道、戦や政治史、文学等とを素直な感覚から比較していき、日本人の感じ方、考え方の説明を試みたもので、当時の知識人階級に大変広く読まれました。

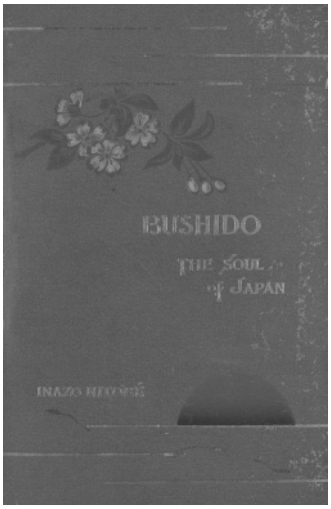
エジソンは、このBushidoや日本の歴史書など、日本関連の書籍をカリフォルニアのフォート・マイヤーズの別荘、「エジソンの冬の屋敷」（連載第８回を参照）のベッドサイドに置いて愛読していました。Bushidoは米ルーズベルト大統領やケネディ大統領の愛読書でもありました。

エジソンは日本人の精神性に惹かれ、世界の広さに対して探求心を強めました。また新渡戸の方も、米国人の妻メアリ（日本名は万里子）との初子に、エジソンの名をもらい、遠益（トーマス）と名付けています。しかし残念ながら遠益は、この世に生を受けた数日後に天に召されています。新渡戸は、同書の世界的貢献によって、国際連盟事務次長も勤め、世界初の人種的差別撤廃規定を提唱しました。残念ながら、過半数の支持を得るも、採択されていません。

ちなみに、エジソンの墓地には、エジソン夫妻を護るが如く、日本から送られた奈良春日大社にならう石灯篭が厳かに立っています。

エジソンの勤勉さと道徳心の高さは、日本人の精神性と呼応したことは容易に理解できます。

この「すごい」エジソンに、敬愛の情を込めて、はるばる日本から会いにきて、親愛なる交流を続け、日米友好に務めた日本人たちも、これまた「すごい」錚々たる人達が揃っています。



書影　Inazo Nitobe　Bushido:The Soul of Japan

⑵　日本人の発明事業史を知る

今回、そうした、エジソンと縁のある「発明事業化スピリッツを大切にした日本人」について、ページを割きたいと思います。

意図としては、欧米系の歴史的資料においては、日本に関する関心が低いために、記述が消極的、もしくは無くなります。その結果として、それをそのまま流せば、欧米の情報で終始することとなります。それは受け売りであって、そうした受け身の学びからは、事業という血を注ぐ実践行為をテーマとする本連載にしては積極性に欠けるものでありましょう。

また、「世界の中の日本」という視点において、友好国増加、世界平和の観点から、日本の先人たちの創意工夫の取組みの歴史は、我が国の貴重な知的財産です。

日本人自身がそれを忘れ去っていくのでは、元も子もないもので、大切に受け継ぎ、こうした情報を伝承し、現在、将来へと活かして、信頼の世界的事業を興していくことに、資するようにと願っています。

２．エジソンと日本人

トップバッターは、「近代日本経済の父」と呼ばれ、多くの発明事業家を助けた渋沢栄一です。

経営学者で著名なピーター・ドラッガーは、その著書「断絶の時代」で、渋沢を絶賛しています。

「岩崎弥太郎と渋沢栄一の名は、国外では、わずかの日本研究家が知るだけである。しかしながら彼らの偉業は、ロスチャイルド、モルガン、クルップ、ロックフェラーを凌ぐ。（中略）岩崎と渋沢は、たんなる豊かな日本ではなく、創造力のある強い日本をつくろうとした。」

この渋沢とエジソンは、両者ともに道徳心重視と民間活力による経済活性化の考えについて、大いに通じるところがあり、素晴らしい交流が続きました。

次に、金子賢太郎ですが、明治憲法を起草し、日本の対米スポークスマンとして、日露戦争の勝利に貢献した金子も、以前からエジソンと交流があり、エジソンの逝去に際しては追悼会長を務めています。ちなみにエジソンのライバル、ベルとも交流があり、日本に最初の電話を導入するきっかけも作っています。

続いて、「真珠王」こと御木本幸吉です。渋沢栄一に頼んでエジソンと面会出来たことで、御木本は発明事業家として大きな自信を得て、世界市場への足掛かりを確かなものとしていきました。

続いて、かの野口英世もエジソンと会っています。野口はその世界的な研究実績により、所属していたロックフェラー研究所の伝手で、福島の同郷の友でパトロンでもある星製薬創業者の星一をエジソンに会わせることが出来ました。

星一は、「東洋の製薬王」と称された人物で、SF小説界の巨匠の星新一の父であり、星薬科大学の創設者です。星一はエジソンの発明事業スピリッツを継ぐ革新的な経営手法でした。

その星一の元で一時期働いていた、現在、モリサワフォントで知られる、株式会社モリサワ創業者の森澤信夫は、世界初の「写真植字機」（写植機）発明の実用化販売を成し遂げています。発明事業スピリッツが継承され、星一は、森澤を「わが社の小エジソン」と呼んでいます。

次に、エジソンの元で働いていた岡部芳郎です。他にも、エジソン社で働いた人物に岩垂邦彦がいます。

岩垂は、日本初の外資系企業NECの創業者ですが、NEC創業の前に、エジソン社に勤めており、その腕を関西の経済界に見込まれ、現在の関西電力の創業に尽力しています。

最後は廣田精一です。東京電機大学と神戸大学工学部、理工系出版のオーム社の創設者であり、我が国の電気工業の勃興期にあって、日本の発展に尽くした人物です。

なお、「日本のエジソン」、「電力の父」とも称される東芝の創業者、藤岡市助については、今後の連載において、取り上げる予定です。

それでは、盛りだくさん！の、明治期の俊英たちのドラマにあふれる人生を見ていきましょう。

1874（明治７）年、歌川広重（３代）、「東京開化名勝京橋石造銀座通り両側煉化石商家盛栄之図」、江戸東京博物所蔵